

CFE 325545 (1/4)  
292490/2000

09/960,285



日 本 国 特 許 庁  
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出 願 年 月 日

Date of Application:

2000年 9月26日

出 願 番 号

Application Number:

特願2000-292490

出 願 人

Applicant(s):

キヤノン株式会社

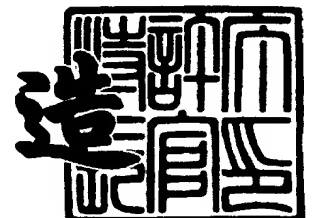
RECEIVED  
MAY 08 2002  
TC 1700

RECEIVED  
DEC 11 2001  
TC 2800 MAIL ROOM

2001年10月19日

特許庁長官  
Commissioner,  
Japan Patent Office

及 川 耕 造



出証番号 出証特2001-3091959

【書類名】 特許願

【整理番号】 4315006

【提出日】 平成12年 9月26日

【あて先】 特許庁長官殿

【国際特許分類】 H05B 33/00

【発明の名称】 発光素子

【請求項の数】 2

【発明者】

    【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社  
社内

    【氏名】 坪山 明

【発明者】

    【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社  
社内

    【氏名】 岡田 伸二郎

【発明者】

    【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社  
社内

    【氏名】 滝口 隆雄

【発明者】

    【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社  
社内

    【氏名】 森山 孝志

【発明者】

    【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社  
社内

    【氏名】 鎌谷 淳

【発明者】

    【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号 キヤノン株式会社

社内

【氏名】 水谷 英正

【特許出願人】

【識別番号】 000001007

【氏名又は名称】 キヤノン株式会社

【代理人】

【識別番号】 100096828

【弁理士】

【氏名又は名称】 渡辺 敬介

【電話番号】 03-3501-2138

【選任した代理人】

【識別番号】 100059410

【弁理士】

【氏名又は名称】 豊田 善雄

【電話番号】 03-3501-2138

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 004938

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9703710

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 発光素子

【特許請求の範囲】

【請求項1】 下記一般式（1）で示される金属配位化合物を含む有機化合物層を有することを特徴とする発光素子。

【化1】



（但し、MはIr、Rh、Pdであり、nは2、または3である。

NとCは、金属原子Mに結合した窒素及び炭素原子であり、A、Bは置換基を有していてもよい窒素原子及び炭素原子を含む環状基を示し、A、Bは、共有結合によって結合している。〔該置換基はハロゲン原子、ニトロ基、トリアルキルシリル基（該アルキル基はそれぞれ独立して炭素原子数1から8の直鎖状または分岐状のアルキル基である。）、炭素原子数1から20の直鎖状または分岐状のアルキル基（該アルキル基中の1つもしくは隣接しない2つ以上のメチレン基は—O—、—S—、—CO—、—CO—O—、—O—CO—、—CH=CH—、—C≡C—で置き換えられていてもよく、該アルキル基中の水素原子はフッ素原子に置換されていてもよい。）を示す。〕ただしAとBの環構造に存在する窒素原子と硫黄原子の数の和は2以上である。）

【請求項2】 前記金属配位化合物を含む有機化合物層が、対向する2つの電極に挟持され、該電極間に電圧を印加することにより発光する電界発光素子であることを特徴とする請求項1に記載の発光素子。

【発明の詳細な説明】

【0001】

【発明の属する技術分野】

本発明は、有機化合物を用いた発光素子に関するものであり、さらに詳しくは

、金属配位化合物を発光材料としてもちいることで安定した効率の高い発光素子に関するものである。

#### 【0002】

#### 【従来の技術】

有機EL素子は、高速応答性や高効率の発光素子として、応用研究が精力的に行われている。その基本的な構成図1(a)・(b)に示した[例えばMacromol. Symp. 125, 1~48 (1997) 参照]。

#### 【0003】

図1に示したように、一般に有機EL素子は透明基板15上に透明電極14と金属電極11の間に複数層の有機膜層から構成される。

#### 【0004】

図1(a)では、有機層が発光層12とホール輸送層13からなる。透明電極14としては、仕事関数が大きなITOなどが用いられ、透明電極14からホール輸送層13への良好なホール注入特性を持たせている。金属電極11としては、アルミニウム、マグネシウムあるいはそれらを用いた合金などの仕事関数の小さな金属材料を用い有機層への良好な電子注入性を持たせる。これら電極には、50~200nmの膜厚が用いられる。

#### 【0005】

発光層12には、電子輸送性と発光特性を有するアルミキノリノール錯体など(代表例は、化2に示すAlq3)が用いられる。また、ホール輸送層13には、例えばトリフェニルジアミン誘導体(代表例は、化2に示す $\alpha$ -NPD)など電子供与性を有する材料が用いられる。

#### 【0006】

以上の構成した素子は整流性を示し、金属電極11を陰極に透明電極14を陽極になるように電界を印加すると、金属電極11から電子が発光層12に注入され、透明電極15からはホールが注入される。

#### 【0007】

注入されたホールと電子は発光層12内で再結合により励起子が生じ発光する。この時ホール輸送層13は電子のブロッキング層の役割を果たし、発光層12

／ホール輸送層13界面の再結合効率が上がり、発光効率が上がる。

【0008】

さらに、図1(b)では、図1(a)の金属電極11と発光層12の間に、電子輸送層16が設けられている。発光と電子・ホール輸送を分離して、より効果的なキャリアブロッキング構成にすることで、効率的な発光を行うことができる。電子輸送層16としては、例えば、オキサジアゾール誘導体などを用いることができる。

【0009】

これまで、一般に有機EL素子に用いられている発光は、発光中心の分子の一重項励起子から基底状態になるときの蛍光が取り出されている。一方、一重項励起子を経由した蛍光発光を利用するのではなく、三重項励起子を経由したりん光発光を利用する素子の検討がなされている。発表されている代表的な文献は、文献1: Improved energy transfer in electrophosphorescent device (D. F. O'Brienら、Applied Physics Letters Vol 74, No3 p 422 (1999))、文献2: Very high-efficiency green organic light-emitting devices based on electrophosphorescence (M. A. Baldoら、Applied Physics Letters Vol 75, No1 p4 (1999))である。

【0010】

これらの文献では、図1(c)に示す有機層が4層構成が主に用いられている。それは、陽極側からホール輸送層13、発光層12、励起子拡散防止層17、電子輸送層16からなる。用いられている材料は、化2に示すキャリア輸送材料とりん光発光性材料である。各材料の略称は以下の通りである。

Alq3: アルミーキノリノール錯体

$\alpha$ -NPD: N4, N4'-Dinaphthalen-1-yl-N4, N4'-diphenyl-biphenyl-4, 4'-diamine

CBP: 4, 4'-N, N'-dicarbazole-biphenyl

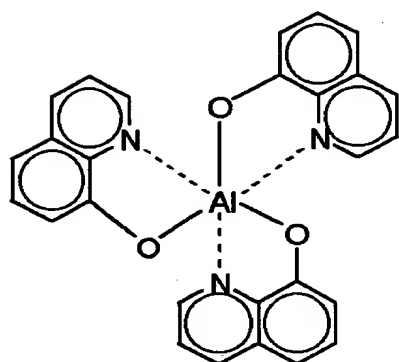
BCP: 2, 9-dimethyl-4, 7-diphenyl-1, 10-phenanthroline

PtOEP: 白金-オクタエチルポルフィリン錯体

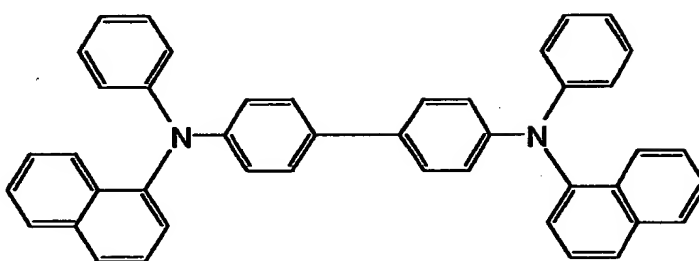
Ir(ppy)<sub>3</sub>: イリジウム-フェニルピリミジン錯体

【0011】

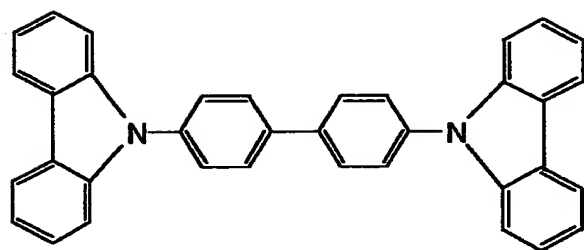
【化2】



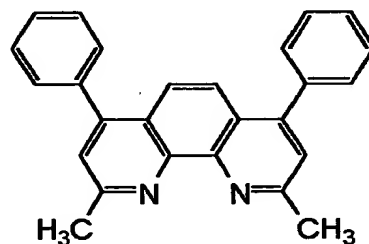
Alq3



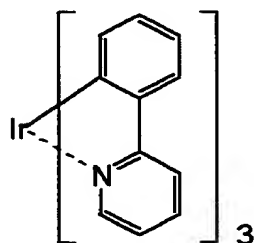
$\alpha$ -NPD



CBP



BCP



Ir(ppy)<sub>3</sub>

【0012】

文献1, 2とも高効率が得られたのは、ホール輸送層13に $\alpha$ -NPD、電子

輸送層 16 に A l q 3、励起子拡散防止層 17 に B C P、発光層 12 に C B P をホスト材料として、6 % 程度の濃度で、りん光発光性材料である P t O E P または I r ( p p y )<sub>3</sub> を混入して構成したものである。

## 【 0 0 1 3 】

りん光性発光材料が特に注目されている理由は、原理的に高発光効率が期待できるからである。その理由は、キャリア再結合により生成される励起子は 1 重項励起子と 3 重項励起子からなり、その確率は 1 : 3 である。これまでの有機 E L 素子は、1 重項励起子から基底状態に遷移する際の蛍光を発光として取り出していたが、原理的にその発光収率は生成された励起子数に対して、25 % でありこれが原理的上限であった。しかし、3 重項から発生する励起子からのりん光を用いれば、原理的に少なくとも 3 倍の収率が期待され、さらに、エネルギー的に高い 1 重項からの 3 重項への項間交差による転移を考え合わせれば、原理的には 4 倍の 100 % の発光収率が期待できる。

## 【 0 0 1 4 】

他に、三重項からの発光を要した文献には、特開平 11 - 329739 号公報（有機 E L 素子及びその製造方法）、特開平 11 - 256148 号公報（発光材料およびこれを用いた有機 E L 素子）、特開平 8 - 319482 号公報（有機エレクトロルミネッセント素子）等がある。

## 【 0 0 1 5 】

## 【発明が解決しようとする課題】

上記、りん光発光を用いた有機 E L 素子では、特に通電状態の発光劣化が問題となる。りん光発光素子の発光劣化の原因は明らかではないが、一般に 3 重項寿命が 1 重項寿命より、3 桁以上長いために、分子がエネルギーの高い状態に長く置かれるため、周辺物質との反応、励起多量体の形成、分子微細構造の変化、周辺物質の構造変化などが起こるのではないかと考えられている。

## 【 0 0 1 6 】

いずれにしても、りん光発光素子は、高発光効率が期待されるが一方で通電劣化が問題となる。

## 【 0 0 1 7 】



そこで、本発明は、高効率発光で、長い期間高輝度を保ち、通電劣化が小さい発光素子を提供することを目的とする。

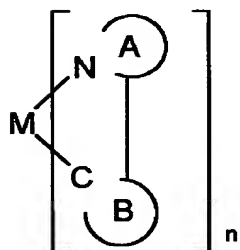
【 0 0 1 8 】

【課題を解決するための手段】

即ち、本発明の発光素子は、下記一般式（１）で示される金属配位化合物を含む有機化合物層を有することを特徴とする。

【 0 0 1 9 】

【化 3】



(1)

【 0 0 2 0 】

{但し、MはIr、Rh、Pdであり、nは2、または3である。}

NとCは、金属原子Mに結合した窒素及び炭素原子であり、A、Bは置換基を有していてもよい窒素原子及び炭素原子を含む環状基を示し、A、Bは、共有結合によって結合している。〔該置換基はハロゲン原子、ニトロ基、トリアルキルシリル基（該アルキル基はそれぞれ独立して炭素原子数1から8の直鎖状または分岐状のアルキル基である。）、炭素原子数1から20の直鎖状または分岐状のアルキル基（該アルキル基中の1つもしくは隣接しない2つ以上のメチレン基は－O－、－S－、－CO－、－CO－O－、－O－CO－、－CH＝CH－、－C≡C－で置き換えられていてもよく、該アルキル基中の水素原子はフッ素原子に置換されていてもよい。）を示す。〕ただしAとBの環構造に存在する窒素原子と硫黄原子の数の和は2以上である。}

【 0 0 2 1 】

本発明の発光素子は、前記金属配位化合物を含む有機化合物層が、対向する2つの電極に挟持され、該電極間に電圧を印加することにより発光する電界発光素子であることが好ましい。

【0022】

【発明の実施の形態】

発光層が、キャリア輸送性のホスト材料とりん光発光性のゲストからなる場合、3重項励起子からのりん光発光にいたる主な過程は、以下のいくつかの過程からなる。

1. 発光層内での電子・ホール輸送
2. ホストの励起子生成
3. ホスト分子間の励起エネルギー伝達
4. ホストからゲストへの励起エネルギー移動
5. ゲストの三重項励起子生成
6. ゲストの三重項励起子→基底状態時のりん光発光

【0023】

それぞれの過程における所望のエネルギー移動や、発光はさまざまな失活過程と競争でおこる。

【0024】

EL素子の発光効率を高めるためには、発光中心材料そのものの発光量子収率が大きいことは言うまでもない。しかしながら、ホスト-ホスト間、あるいはホスト-ゲスト間のエネルギー移動が如何に効率的にできるかも大きな問題となる。また、通電による発光劣化は今のところ原因は明らかではないが、少なくとも発光中心材料そのもの、または、その周辺分子による発光材料の環境変化に関連したものと想定される。

【0025】

この理由から、本発明者らは、発光中心材料を前記一般式(1)で示される金属配位化合物にすることの効果をしらべ、高効率発光で、さらに、長い期間高輝度を保ち、通電劣化が小さいことを見出した。

【0026】

本発明に用いた金属配位化合物は、りん光性発光をするものであり、最低励起状態が、3重項状態のMLCT\* (Metal-to-Ligand charge transfer) 励起状態であると考えられる。これらの状態から基底

状態に遷移するときりん光発光が生じる。

【 0 0 2 7 】

本発明の発光材料のりん光収率は、0.15から0.9と高い値が得られ、りん光寿命は1～30  $\mu$ secと短寿命であった。りん光寿命が短いことは、EL素子にしたときに高発光効率化の条件となる。すなわち、りん光寿命が長いと、発光待ち状態の3重項励起状態の分子が多くなり、特に高電流密度時に発光効率が低下すると言う問題があった。本発明の材料は、高りん光発光収率を有し、短りん光寿命をもつEL素子の発光材料に適した材料である。また、短りん光寿命が実現できるため、3重項にとどまる時間が短いために、エネルギーの高い状態にある時間が小さいので素子劣化が小さく耐久性能が高いことが想定される。

【 0 0 2 8 】

実際に、通電試験においても、本発明の発光材料を用いると高い安定性をしめした。

【 0 0 2 9 】

また、本発明の配位子には、2つの環内に窒素原子・硫黄原子が合わせて複数個含まれるため、エネルギーギャップの低下、すなわち、長波長発光が可能になる。これは、便宜的にMetalの電子軌道のHOMO/LUMOと配位子の電子軌道のHOMO/LUMOを別に考えられるとした場合、配位子のHOMO/LUMOのエネルギーが窒素原子・硫黄原子によって低下するため、金属のHOMOと配位子のLUMO間のエネルギーギャップが減少し、最低励起状態であるMLCT状態からの発光が長波長化できる、と理解できる。従って、本発明の金属化合物は、高効率で、長波長（橙から赤）の発光に適した発光材料である。

【 0 0 3 0 】

また、本発明の発光材料は、窒素や硫黄原子が配位子に複数ふくまれるため、電子雲が、配位子から大きく張り出し、これらの原子を介して他分子との相互作用が促進されエネルギー転移の効率が向上すると考えられる。従って、これまでに、長波長（橙から赤）で高収率・高安定性の高い発光材料はなかったが、本発明の発光材料で実現することができる。

【 0 0 3 1 】

また、りん光発光材料の場合、発光特性が、その分子環境に強く依存する。蛍光発光素子の場合、発光材料の基本的性質はフォトルミネッセンスで検討されるが、りん光発光の場合は周囲にあるホスト分子の極性の強さ、温度、固体／液体に依存するので、フォトルミネッセンスの結果が、EL素子の発光特性を反映しない場合が多い。フォトルミネッセンスの結果から一部の特性を除いてEL特性を見積もることは一般にできない。

## 【 0 0 3 2 】

さらに、以下の実施例に示すように、通電耐久試験において、本発明の化合物は、安定性においても優れた性能を有することが明らかとなった。

## 【 0 0 3 3 】

本発明の発光素子は、図1に示す様に、金属配位化合物を含む有機化合物層が、対向する2つの電極に挟持され、該電極間に電圧を印加することにより発光する電界発光素子であることが好ましい。

## 【 0 0 3 4 】

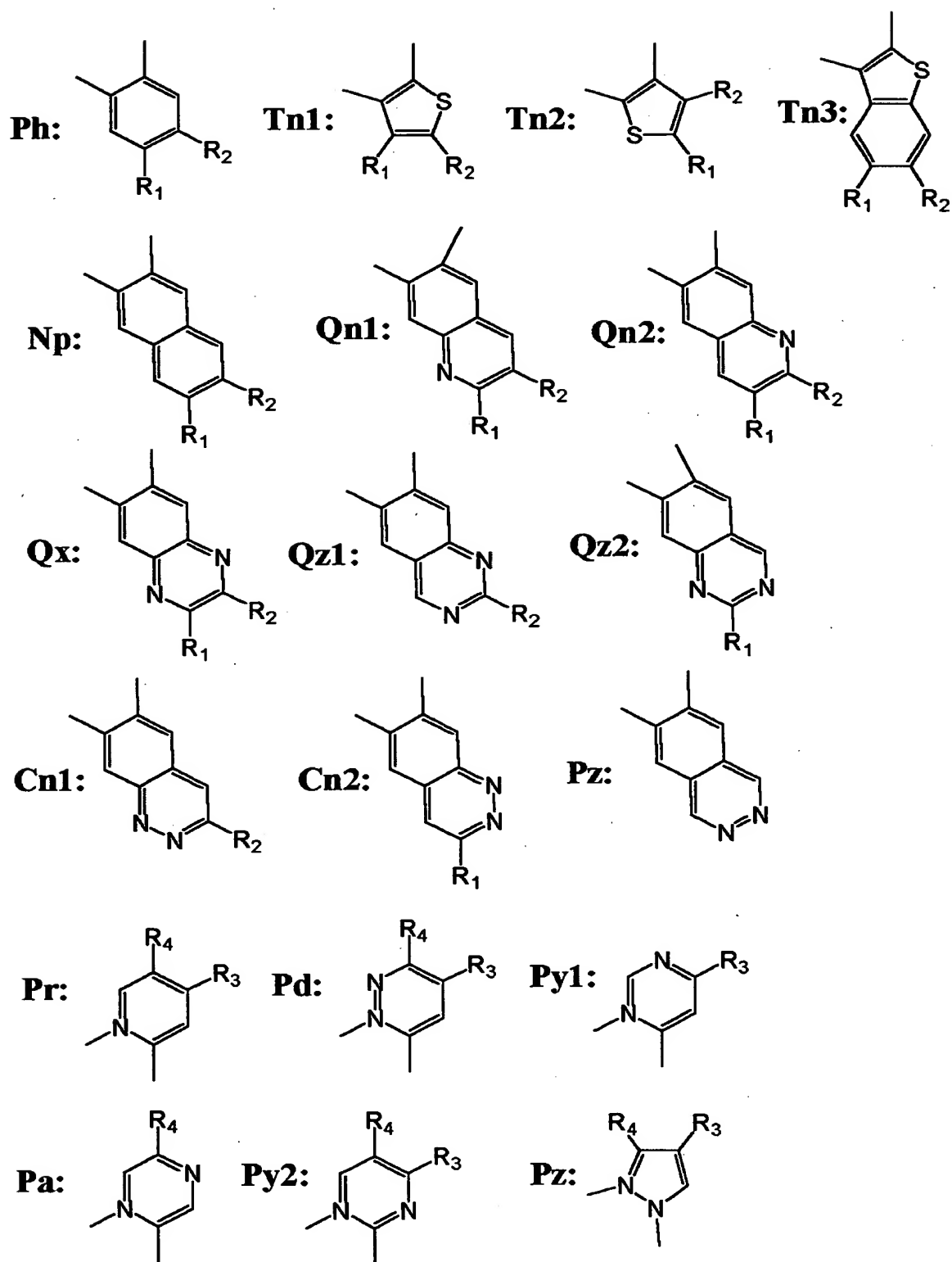
本発明で示した高効率な発光素子は、省エネルギーや高輝度が必要な製品に応用が可能である。応用例としては表示装置・照明装置やプリンターの光源、液晶表示装置のバックライトなどが考えられる。表示装置としては、省エネルギーや高視認性・軽量のフラットパネルディスプレイが可能となる。また、プリンターの光源としては、現在広く用いられているレーザビームプリンタのレーザ光源部を、本発明の発光素子に置き換えることができる。独立にアドレスできる素子をアレイ上に配置し、感光ドラムに所望の露光を行うことで、画像形成する。本発明の素子を用いることで、装置体積を大幅に減少することができる。照明装置やバックライトに関しては、本発明による省エネルギー効果が期待できる。

## 【 0 0 3 5 】

以下本発明に用いられる金属配位化合物の具体的な構造式を表1から表4に示す。但し、これらは、代表例を例示しただけで、本発明は、これに限定されるものではない。表1～表7に使用しているPh～Pzは化4に示した構造を表している。

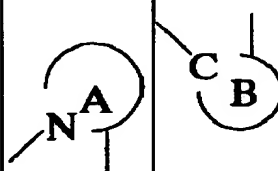
## 【 0 0 3 6 】

【化 4】




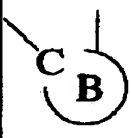
【0037】

【表1】

No	M	n		R1	R2	R3	R4	
1	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	H
2	Ir	3	Pr	Tn2	H	H	H	H
3	Ir	3	Pr	Tn3	H	H	H	H
4	Ir	3	Pr	Qn1	H	H	H	H
5	Ir	3	Pr	Qn2	H	H	H	H
6	Ir	3	Pr	Qx	H	H	H	H
7	Ir	3	Pr	Qz1	H	H	H	H
8	Ir	3	Pr	Qz2	H	H	H	H
9	Ir	3	Pr	Cn1	H	H	H	H
10	Ir	3	Pr	Cn2	H	H	H	H
11	Ir	3	Pr	Pz	H	H	H	H
12	Ir	3	Pd	Ph	H	H	H	H
13	Ir	3	Pd	Tn1	H	H	H	H
14	Ir	3	Pd	Tn2	H	H	H	H
15	Ir	3	Pd	Tn3	H	H	H	H
16	Ir	3	Pd	Np	H	H	H	H
17	Ir	3	Pd	Qn1	H	H	H	H
18	Ir	3	Pd	Qn2	H	H	H	H
19	Ir	3	Pd	Qx	H	H	H	H
20	Ir	3	Pd	Qz1	H	H	H	H
21	Ir	3	Pd	Qz2	H	H	H	H
22	Ir	3	Pd	Cn1	H	H	H	H
23	Ir	3	Pd	Cn2	H	H	H	H
24	Ir	3	Pd	Pz	H	H	H	H
25	Ir	3	Py1	Ph	H	H	H	H


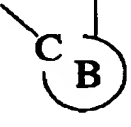
【0038】

【表2】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
26	Ir	3	Py1	Tn1	H	H	H	H
27	Ir	3	Py1	Tn2	H	H	H	H
28	Ir	3	Py1	Tn3	H	H	H	H
29	Ir	3	Py1	Np	H	H	H	H
30	Ir	3	Py1	Qn1	H	H	H	H
31	Ir	3	Py1	Qn2	H	H	H	H
32	Ir	3	Pa	Ph	H	H	H	H
33	Ir	3	Pa	Tn1	H	H	H	H
34	Ir	3	Pa	Tn2	H	H	H	H
35	Ir	3	Pa	Np	H	H	H	H
36	Ir	3	Pa	Qn1	H	H	H	H
37	Ir	3	Pa	Qn2	H	H	H	H
38	Ir	3	Py2	Ph	H	H	H	H
39	Ir	3	Py2	Tn1	H	H	H	H
40	Ir	3	Py2	Tn2	H	H	H	H
41	Ir	3	Py2	Tn3	H	H	H	H
42	Ir	3	Py2	Np	H	H	H	H
43	Ir	3	Py2	Qn1	H	H	H	H
44	Ir	3	Py2	Qn2	H	H	H	H
45	Ir	3	Pz	Ph	H	H	H	H
46	Ir	3	Pz	Tn1	H	H	H	H
47	Ir	3	Pz	Tn2	H	H	H	H
48	Ir	3	Pz	Np	H	H	H	H
49	Ir	3	Pz	Qn1	H	H	H	H
50	Ir	3	Pz	Qn2	H	H	H	H

【0039】


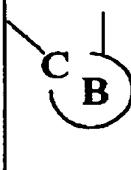
【表 3】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
51	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	H
52	Rh	3	Pr	Tn2	H	H	H	H
53	Rh	3	Pr	Tn3	H	H	H	H
54	Rh	3	Pr	Qn1	H	H	H	H
55	Rh	3	Pr	Qn2	H	H	H	H
56	Rh	3	Pr	Qx	H	H	H	H
57	Rh	3	Pr	Qz1	H	H	H	H
58	Rh	3	Pr	Qz2	H	H	H	H
59	Rh	3	Pr	Cn1	H	H	H	H
60	Rh	3	Pr	Cn2	H	H	H	H
61	Rh	3	Pr	Pz	H	H	H	H
62	Rh	3	Pd	Ph	H	H	H	H
63	Rh	3	Pd	Tn1	H	H	H	H
64	Rh	3	Pd	Tn2	H	H	H	H
65	Rh	3	Pd	Tn3	H	H	H	H
66	Rh	3	Pd	Np	H	H	H	H
67	Rh	3	Pd	Qn1	H	H	H	H
68	Rh	3	Pd	Qn2	H	H	H	H
69	Rh	3	Pd	Qx	H	H	H	H
70	Rh	3	Pd	Qz1	H	H	H	H
71	Rh	3	Pd	Qz2	H	H	H	H
72	Rh	3	Pd	Cn1	H	H	H	H
73	Rh	3	Pd	Cn2	H	H	H	H
74	Rh	3	Pd	Pz	H	H	H	H
75	Rh	3	Py1	Ph	H	H	H	H

【 0 0 4 0 】


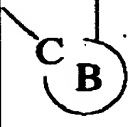


【表 4】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
76	Rh	3	Py1	Tn1	H	H	H	H
77	Rh	3	Py1	Tn2	H	H	H	H
78	Rh	3	Py1	Tn3	H	H	H	H
79	Rh	3	Py1	Np	H	H	H	H
80	Rh	3	Py1	Qn1	H	H	H	H
81	Rh	3	Py1	Qn2	H	H	H	H
82	Rh	3	Pa	Ph	H	H	H	H
83	Rh	3	Pa	Tn1	H	H	H	H
84	Rh	3	Pa	Tn2	H	H	H	H
85	Rh	3	Pa	Np	H	H	H	H
86	Rh	3	Pa	Qn1	H	H	H	H
87	Rh	3	Pa	Qn2	H	H	H	H
88	Rh	3	Py2	Ph	H	H	H	H
89	Rh	3	Py2	Tn1	H	H	H	H
90	Rh	3	Py2	Tn2	H	H	H	H
91	Rh	3	Py2	Tn3	H	H	H	H
92	Rh	3	Py2	Np	H	H	H	H
93	Rh	3	Py2	Qn1	H	H	H	H
94	Rh	3	Py2	Qn2	H	H	H	H
95	Rh	3	Pz	Ph	H	H	H	H
96	Rh	3	Pz	Tn1	H	H	H	H
97	Rh	3	Pz	Tn2	H	H	H	H
98	Rh	3	Pz	Np	H	H	H	H
99	Rh	3	Pz	Qn1	H	H	H	H
100	Rh	3	Pz	Qn2	H	H	H	H


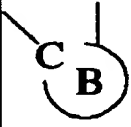
【0041】

【表5】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
101	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	H
102	Pd	2	Pr	Tn2	H	H	H	H
103	Pd	2	Pr	Tn3	H	H	H	H
104	Pd	2	Pr	Qn1	H	H	H	H
105	Pd	2	Pr	Qn2	H	H	H	H
106	Pd	2	Pr	Qx	H	H	H	H
107	Pd	2	Pr	Qz1	H	H	H	H
108	Pd	2	Pr	Qz2	H	H	H	H
109	Pd	2	Pr	Cn1	H	H	H	H
110	Pd	2	Pr	Cn2	H	H	H	H
111	Pd	2	Pr	Pz	H	H	H	H
112	Pd	2	Pd	Ph	H	H	H	H
113	Pd	2	Pd	Tn1	H	H	H	H
114	Pd	2	Pd	Tn2	H	H	H	H
115	Pd	2	Pd	Tn3	H	H	H	H
116	Pd	2	Pd	Np	H	H	H	H
117	Pd	2	Pd	Qn1	H	H	H	H
118	Pd	2	Pd	Qn2	H	H	H	H
119	Pd	2	Pd	Qx	H	H	H	H
120	Pd	2	Pd	Qz1	H	H	H	H
121	Pd	2	Pd	Qz2	H	H	H	H
122	Pd	2	Pd	Cn1	H	H	H	H
123	Pd	2	Pd	Cn2	H	H	H	H
124	Pd	2	Pd	Pz	H	H	H	H
125	Pd	2	Py1	Ph	H	H	H	H

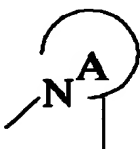
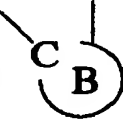
【0042】

【表 6】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
126	Pd	2	Py1	Tn1	H	H	H	H
127	Pd	2	Py1	Tn2	H	H	H	H
128	Pd	2	Py1	Tn3	H	H	H	H
129	Pd	2	Py1	Np	H	H	H	H
130	Pd	2	Py1	Qn1	H	H	H	H
131	Pd	2	Py1	Qn2	H	H	H	H
132	Pd	2	Pa	Ph	H	H	H	H
133	Pd	2	Pa	Tn1	H	H	H	H
134	Pd	2	Pa	Tn2	H	H	H	H
135	Pd	2	Pa	Np	H	H	H	H
136	Pd	2	Pa	Qn1	H	H	H	H
137	Pd	2	Pa	Qn2	H	H	H	H
138	Pd	2	Py2	Ph	H	H	H	H
139	Pd	2	Py2	Tn1	H	H	H	H
140	Pd	2	Py2	Tn2	H	H	H	H
141	Pd	2	Py2	Tn3	H	H	H	H
142	Pd	2	Py2	Np	H	H	H	H
143	Pd	2	Py2	Qn1	H	H	H	H
144	Pd	2	Py2	Qn2	H	H	H	H
145	Pd	2	Pz	Ph	H	H	H	H
146	Pd	2	Pz	Tn1	H	H	H	H
147	Pd	2	Pz	Tn2	H	H	H	H
148	Pd	2	Pz	Np	H	H	H	H
149	Pd	2	Pz	Qn1	H	H	H	H
150	Pd	2	Pz	Qn2	H	H	H	H


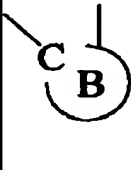
【 0 0 4 3 】

【表7】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
151	Ir	3	Pr	Tn1	H	$\text{Si}(\text{CH}_3)_3$	H	H
152	Ir	3	Pr	Tn1	H	$\text{SiC}_2\text{H}_5$	H	H
153	Ir	3	Pr	Tn1	H	$\text{OCH}_3$	H	H
154	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	F
155	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	F	F
156	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{C}_3\text{H}_{11}$
157	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{OCH}_3$
158	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	$\text{OC}_2\text{H}_5$	H
159	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{OCF}_3$
160	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{SC}_2\text{H}_5$
161	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{COC}_2\text{H}_5$
162	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{COOC}_2\text{H}_5$
163	Ir	3	Pr	Tn1	H	H	H	$\text{OCOC}_2\text{H}_5$
164	Ir	3	Py1	Np	H	F	H	H
165	Ir	3	Pa	Np	H	$\text{OCH}_3$	H	H
166	Ir	3	Pz	Ph	H	H	H	$\text{CH}_3$
167	Ir	3	Pd	Ph	H	$\text{NO}_2$	H	H
168	Ir	3	Py1	Ph	H	$\text{NO}_2$	H	H
169	Ir	3	Pa	Ph	H	$\text{NO}_2$	H	H
170	Ir	3	Py2	Ph	H	F	H	H
171	Ir	3	Pz	Ph	H	F	H	H
172	Ir	3	Pz	Ph	H	$\text{CH}_2\text{CH}=\text{CH}$ $\text{CH}_2\text{CH}_3$	H	H
173	Ir	3	Pz	Ph	H	$\text{CH}_3\text{C}\equiv$ $\text{CCH}_2\text{CH}_3$	H	H
174	Rh	3	Pr	Tn1	H	$\text{Si}(\text{CH}_3)_3$	H	H
175	Rh	3	Pr	Tn1	H	$\text{OCH}_3$	H	H

【0044】

【表 8】

No	M	n			R1	R2	R3	R4
176	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	F
177	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	F	F
178	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	C <sub>5</sub> H <sub>11</sub>
179	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	OCH <sub>3</sub>
180	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	OC <sub>4</sub> H <sub>9</sub>	H
181	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	OCF <sub>3</sub>
182	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	SC <sub>2</sub> H <sub>5</sub>
183	Rh	3	Pr	Tn1	H	H	H	COC <sub>2</sub> H <sub>5</sub>
184	Rh	3	Py1	Nb	H	F	H	H
185	Rh	3	Pa	Nb	H	OCH <sub>3</sub>	H	H
186	Rh	3	Pz	Ph	H	H	H	CH <sub>3</sub>
187	Rh	3	Pz	Tn1	H	F	H	H
188	Pd	2	Pr	Tn1	H	Si(CH <sub>3</sub> ) <sub>3</sub>	H	H
189	Pd	2	Pr	Tn1	H	OCH <sub>3</sub>	H	H
190	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	F
191	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	F	F
192	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	C <sub>5</sub> H <sub>11</sub>
193	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	OCH <sub>3</sub>
194	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	OC <sub>4</sub> H <sub>9</sub>	H
195	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	OCF <sub>3</sub>
196	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	SC <sub>2</sub> H <sub>5</sub>
197	Pd	2	Pr	Tn1	H	H	H	COC <sub>2</sub> H <sub>5</sub>
198	Pd	2	Py1	Nb	H	F	H	H
199	Pd	2	Pa	Nb	H	OCH <sub>3</sub>	H	H
200	Pd	2	Pz	Ph	H	H	H	CH <sub>3</sub>
201	Pd	2	Pz	Tn1	H	F	H	H

【0045】

## 【実施例】

本発明に用いた素子作成工程の共通部分を説明する。

## 【0046】

素子構成として、図1(b)に示す有機層が3層の素子を使用した。ガラス基板(透明基板15)上に100nmのITO(透明電極14)をパターンニングして、対向する電極面積が $3\text{mm}^2$ になるようにした。そのITO基板上に、以下の有機層と電極層を $10^{-4}\text{Pa}$ の真空チャンバー内で抵抗加熱による真空蒸着し、連続製膜した。

有機層1(ホール輸送層18)(40nm):  $\alpha$ -NPD

有機層2(発光層12)(30nm): CBP: 所定の配位化合物(重量比5重量%)

有機層3(電子輸送層16)(30nm): Alq3

金属電極層1(15nm): AlLi合金(Li含有量1.8重量%)

金属電極層2(100nm): Al

## 【0047】

ITO側を陽極にAl側を陰極にして電界を印加し、電流値をそれぞれの素子で同じになるように電圧を印加して、輝度の時間変化を測定した。一定の電流量は $70\text{mA}/\text{cm}^2$ とした。その時に得られたそれぞれの素子の輝度の範囲は $0\sim 240\text{cd}/\text{m}^2$ であった。

## 【0048】

素子劣化の原因として酸素や水が問題なので、その要因を除くため真空チャンバーから取り出し後、乾燥窒素フロー中で上記測定を行った。

## 【0049】

(実施例1～11、比較例1)

各化合物を用いた素子の通電耐久テストの結果を表9に示す。比較例として化2に示した $\text{Ir}(\text{ppy})_3$ を発光材料として用いた素子の実験を行った。本発明の発光材料を用いた素子より明らかに輝度半減時間が小さくなり、本発明の材料の安定性に由来した耐久性の高い素子が可能になる。

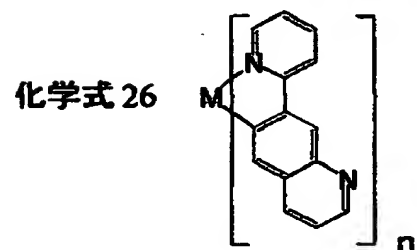
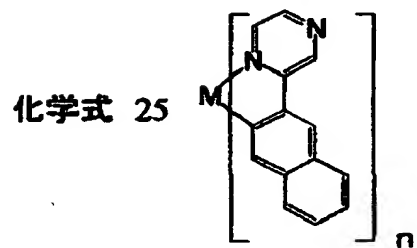
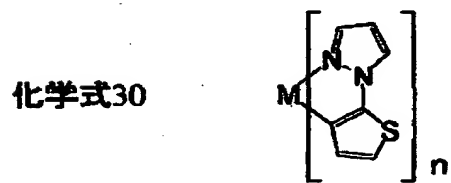
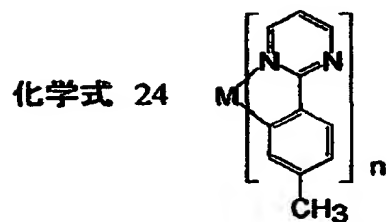
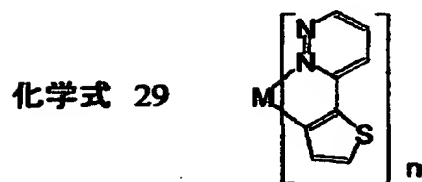
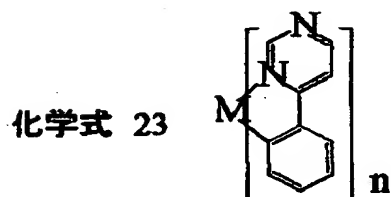
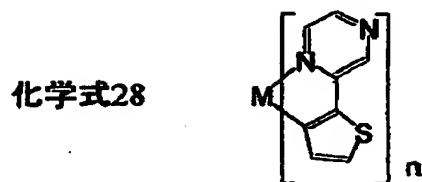
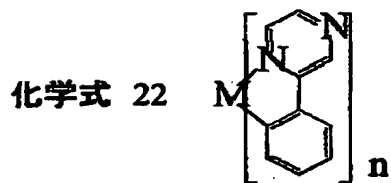
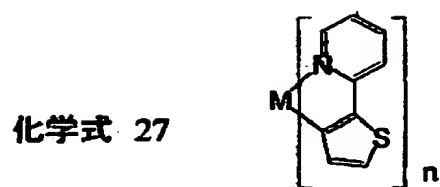
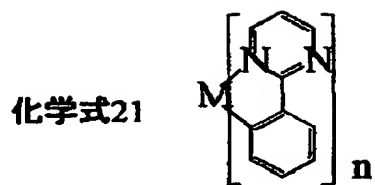
## 【0050】

【表 9】

発光材料				
実施例・比較例 番号	化学式番号 (化 5)	M (金属原子)	n	輝度半減時間 (時間)
実施例 1	21	Ir	3	550
実施例 2	22	Ir	3	900
実施例 3	23	Ir	3	600
実施例 4	24	Ir	3	650
実施例 5	25	Ir	3	950
実施例 6	26	Ir	3	800
実施例 7	27	Ir	3	850
実施例 8	28	Ir	3	600
実施例 9	29	Ir	3	750
実施例 10	30	Ir	3	900
実施例 11	27	27	3	700
比較例 1	化 2 に示した Ir(ppy) <sub>3</sub>			350

【 0 0 5 1 】

【化 5】



【 0 0 5 2 】

【発明の効果】



以上説明のように、本発明で用いる金属配位化合物は、高りん光発光収率を有し、短りん光寿命をもつと共に、長波長（橙から赤）の発光に適し、E L素子の発光材料として適している。

【 0 0 5 3 】

その結果、該金属配位化合物を含む有機化合物層を有する本発明の発光素子は、高効率発光のみならず、長い期間高輝度を保ち、通電劣化が小さい、優れた素子である。

【図面の簡単な説明】

【図 1】

本発明の発光素子の一例を示す図である。

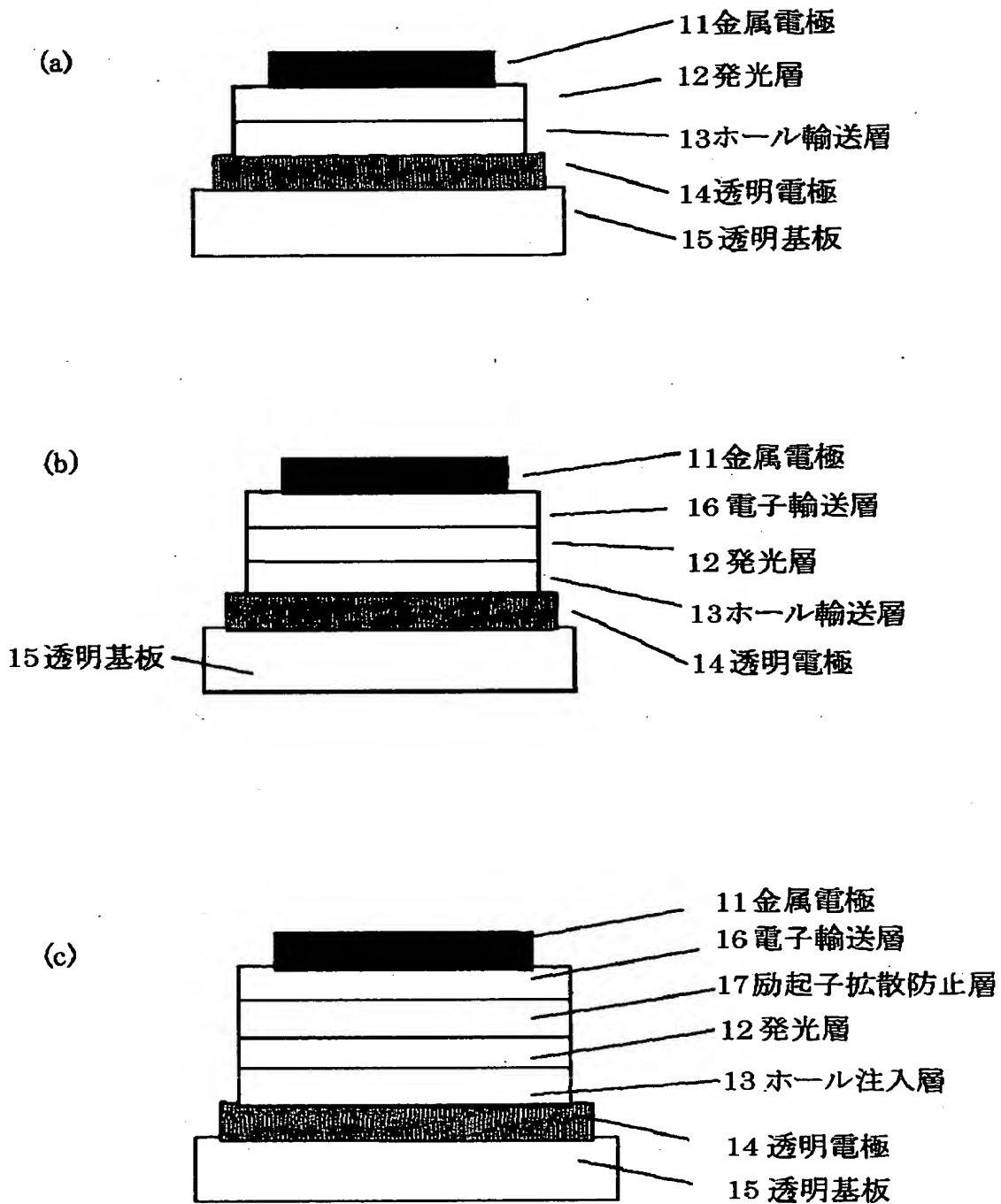
【符号の説明】

- 1 1 金属電極
- 1 2 発光層
- 1 3 ホール輸送層
- 1 4 透明電極
- 1 5 透明基板
- 1 6 電子輸送層
- 1 7 励起子拡散防止層

【書類名】

図面

【図 1】



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 高効率発光で、長い期間高輝度を保ち、通電劣化が小さい発光素子を提供する。

【解決手段】 下記一般式（１）で示される金属配位化合物を含む有機化合物層を有することを特徴とする発光素子。

【化１】



{但し、MはIr、Rh、Pdであり、nは2、または3である。}

NとCは、金属原子Mに結合した窒素及び炭素原子であり、A、Bは置換基を有していてもよい窒素原子及び炭素原子を含む環状基を示し、A、Bは、共有結合によって結合している。〔該置換基はハロゲン原子、ニトロ基、トリアルキルシリル基（該アルキル基はそれぞれ独立して炭素原子数1から8の直鎖状または分岐状のアルキル基である。）、炭素原子数1から20の直鎖状または分岐状のアルキル基（該アルキル基中の1つもしくは隣接しない2つ以上のメチレン基は—O—、—S—、—CO—、—CO—O—、—O—CO—、—CH=CH—、—C≡C—で置き換えられていてもよく、該アルキル基中の水素原子はフッ素原子に置換されていてもよい。）を示す。〕ただしAとBの環構造に存在する窒素原子と硫黄原子の数の和は2以上である。}

【選択図】 図1

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000001007]

1. 変更年月日 1990年 8月30日

[変更理由] 新規登録

住 所 東京都大田区下丸子3丁目30番2号  
氏 名 キヤノン株式会社